

信と行と學に就いて

兒 島 鍊 戒

本佛を信仰し本法を實踐修行するのが、當家の正信正行である。立教開宗以來幾多の賢哲によつてこの正信正行が、體驗せられ實現されてゐる。かつて事實あつた信行、また今現に事實ある信行を採集し、分拆し、綜合し、組織的に記述表現するのが、當家の學である。

信行相對の場合は信は體であり、行は信の顯現したものであるから用である。だから信を基礎としない行や、學を背景としない行は往々にして偽行、迷行、惡行となり、偽社會事業、偽矯風事業となり易いのである。また行の伴はぬ單なる學は書篋以上何ものでもないのである。學によつて正しき信を指示し、信が徹底して行とならねばならぬ。心讀が色讀へ進化する事を土籠御書には

法華經ヲ餘人ノ讀ミ候ハ口バカリ言葉バカリハ讀メドモ心ニ讀マズ。心ハ讀メドモ身ニ讀マズ。色
心ニ法共ニアソバサレタルコソ貴ク候へ(六九五)

と遊ばされ、法華色讀の實踐修行を賞讃され、また宗祖御自ら我は日本一の法華經の行者なりと仰せられてゐる。

折伏逆化（一五三〇、一七八八）は末法通機に對する下種結縁の行法である。一度も御題目を唱へる者は本地化地涌の大菩薩であつて、末法救世の傳道師である。それは實相鈔に明かである。

末法ニシテ妙法蓮華經ノ五字ヲ弘メン者ハ嫌フベカラズ、皆地涌ノ菩薩ニ非ンバ唱ヘ難キ題目ナリ
（九六一）

また松野殿鈔には在家へまで教線擴張をすゝめられ

在家ノ御身ハ只余念ナク南無妙法蓮華經ト御唱ヘアリテ僧ヲモ供養シ給フガ肝心ニテ候也。ソレモ各文ノ如クナラバ隨力演說モアルベキカ。（一五三一）

と遊ばされてゐる。初心の行者下根下機すら、自行化他（二〇五三）にわたる唱題を嚴修するのである。況んや後心の行者上根上機の者は云ふまでもない事である。嚴密な意味に於てはさう云ふ事はないが導師の上に於て便宜上上中下の差別を設けて見るならば信仰學行成滿の行者は上師である。

次に信仰圓滿なるも學の淺い行者、學行が圓熟しても信仰稍々薄い行者は中師である。次に學はあつても修行せず、信じてゐても修行しない者は下師である。現代社會殊に我が宗門に於ては信仰篤く、學問もあり、修行も成滿せる宗教家を待望してゐるのである。宗祖はすでに實相鈔に於て

行學ノ二道ヲ勵ミ候ベシ、行學タヘナバ佛法ハアルベカラズ（九六四）

と教へ、曾谷鈔には

令_レ弘_ニ通_ニ此_ニ大法_ニ之法_ニ必_ニ安_ニ置_ニ一代之聖教_ニ習_ニ學_ニ八宗之章疏_ニ（二二二）

と宣_レべ給_フ。

だから道俗の中に於ては受職の比丘を勝とし、修學解行の比丘中に於ても廣爲他説の師を上師とし能竊爲一人説の師を下師としてゐる（八四四）のである。輝師も分別品宗義鈔（全集一ノ二二）には廣く内外典を學んで本化教學を興隆せよと論じてゐる。幕末時代すでに然り、今や文運隆盛、萬學競起、思想界混亂の秋、我等本化の末流を汲む者は不惜身命の教令を體し、止暇斷眠の激を色讀して、大いに大法の宣傳につとめ、一天四海皆歸妙法の曉を期し布教線の第一線に立たうではないか。